

〈ICT教育：中学校 英語〉

即興で英語を話す力を引き出す教科指導の工夫

——コミュニケーションストラテジーを高めるICTの活用を通して——

沖縄県立与勝緑が丘中学校教諭 神 里 桂 吾

I テーマ設定の理由

現代は、グローバル化が急速に進展し、国境の垣根を超えた社会構造が大きく変化している。そのため、外国語によるコミュニケーション能力は、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定される。このような時代にあつて、学校教育における外国語学習には、外国語によりコミュニケーションを図る資質、能力を育成することが求められている。中学校学習指導要領（平成29年告示）（以下、学習指導要領）では、「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」を、コミュニケーションに必要な5領域と設定し、領域ごとに具体的な目標を設定している。その中でも、「話すこと（やり取り）」は、社会のグローバル化に備え、今回の改訂で新たに設定された領域である。その目標として、「ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で話すことができるようにする。」とあり、「即興」という言葉が初めて使われている。これは、実際のコミュニケーションの場面においては、英文を頭の中で時間をかけて組み立てるのではなく、情報や考えなどを即座にやり取りするという、より実践的なやり取りが必要とされるからである。即ち、これからの中学校における英語学習においては、事前に原稿を書いて読み上げる発表の力に加え、既習の語句や文を用いてその場で話すための実践的な英語力が求められている。

英語がコミュニケーションツールの一つとして多くの国々で長年使われ続けてきた結果、世界中の英語人口は増加し、現在ではその7割近くは非ネイティブスピーカーとなるほど増加を続けている。世界には多様な英語が生まれ、優劣をつけることなく、国際共通語として使われていることから、多くの英語教育研究者が、「英語がもはや英語圏だけのものではなく、ネイティブスピーカーが話す英語を基準として考える必要はない。」と語っている。しかし、私はこれまで、英語でやり取りする活動において、正確な英語を話すことに固執し、「英語を使って伝え合う活動」というよりも、正確に書かれたセリフを暗記、発表させるといった、世界のトレンドと異なる指導を行っていた。その結果、生徒には、実際のコミュニケーションの場面で誤った英語を話すことに恐れ、正確な単語や語句、表現を思い出そうとするあまり会話が途切れ、リズムの良い対話のキャッチボールができず、英語を何年やっても話せないという消極的な考えを導く結果となっていた。今後日本人が英語を使ってコミュニケーションをする相手は、非ネイティブスピーカーである確率が非常に高いことを生徒にも理解させ、正しい英語を使うことよりも、自分の持っている英語を紡ぎだして伝えるという意識を持たせることが重要であると考え。自分の意見や考えを、即興の英語で伝える力を育成し、必要な時に引き出すには、膨大な量の単語や表現を詰め込み、場面に応じて試行錯誤の上、思い出し、完璧な表現にこだわらず、伝えたい「内容」をシンプルな表現と、自分が知っている言葉で言い換える力（コミュニケーションストラテジー）を高めることが必要である。そのためには、実際に「やり取り」する活動を積みながら、国際共通語としての英語を活用し、コミュニケーションをする経験を増やすことが大切であると考え。

そこで本研究では、帯活動において、英語でやり取りする活動を動画として記録し、教師や友達と共有することで、自己の学びを客観視させる。その活動に加えて、英語で表現できなかった内容を、中学校レベルの語彙をもって言い換える練習を、共有、閲覧、整理が容易なデジタルワークシートを用いて行う。この一連の活動を繰り返すことにより、すでに備わっている英語力で言葉を紡ぎ出す方法を学び、コミュニケーションストラテジーを高めることが期待できると考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

話すこと（やり取り）において、学びを客観的に捉えることができる動画ファイルとデジタルワークシートを活用することにより、コミュニケーションストラテジーを高め、即興で話す力を引き出すことができるであろう。

Ⅱ 研究内容

1 理論研究

(1) グローバル人材育成戦略について

日本政府は 2012 年 5 月、新成長戦略実現会議の下に、「グローバル人材育成戦略」を公表した。その「はじめに」には、「人口減少と超高齢化が進む中で、東日本大震災という深刻な危機を経験した我が国経済が本格的な成長軌道へと再浮上するためには、創造的で活力のある若い世代の育成が急務である。とりわけ、グローバル化が加速する 21 世紀の世界経済のなかにあっては、豊かな語学力・コミュニケーション能力や異文化体験を身につけ、国際的に活躍できる『グローバル人材』を我が国で継続的に育てていかなければならない。」と問題提起がなされている。

続けて、TOEFL スコア（世界基準の英語テスト）の国別ランキングで「我が国は 163 か国中 135 位、アジア 30 か国中では、27 位と低迷している」（当時）とあり、具体的な対策として英語教育の強化を図り、語学力とコミュニケーション力を育成することが挙げられている（表 1、2）。新たに示された学習指導要領においても、英語の技能の一つである「話すこと」を「発表」と「やり取り」の 2 領域に区別し、英語による発信力の育成を更に充実させていくことが求められている。

(2) グロービッシュについて

近年、英語人口の 7 割近くが非ネイティブとなり、日本人が英語を話す相手の大半が英語を外国語として使用する人々になってきた。非ネイティブ同士で交わされる英語は、とてもシンプルで、コミュニケーションを交わすには十分なものである。このような英語を取り巻く状況の変化の中で、フランス人のジャン＝ポール・ネリエールが、提唱したのが「グロービッシュ」という世界共通語としての英語である。グロービッシュとは、非ネイティブの人々が実際に使っている様々な英語から、シンプルでコミュニケーションの場面で使いやすい表現を抽出し

表 1 TOEFL スコア国別ランキング (2010)

順位 (全体)	国名	TOEFL スコア Max=120
1 位	オランダ	100
2 位	デンマーク	99
3 位	シンガポール オーストラリア	98
80 位	韓国	81
105 位	中国	77
135 位 ※146 位 (2020)	日本	70
139 位	ギニア	69

表 2 TOEFL スコア国別ランキング (アジア 30 国)

順位 (アジア)	国名	TOEFL スコア Max=120
1 位	シンガポール	98
24 位	アフガニスタン モンゴル	73
27 位 ※26 位 (2020)	日本	70

表 3 グロービッシュの基本ルール

①	使用語を基本的な 1500 語に制限する。
②	文法は 24 項目程度の簡単なものにする。
③	発音は厳密なものを求めない。
④	イディオム（慣用句）やユーモア、比喩表現は使わない。
⑤	ひとつの文は、できるだけ 15 単語以内とする。

たものである。シンプルな英語を使ったコミュニケーション活動を日常的に取り組み、表現力を豊かにすることで、「即興で話す力」が育成され则认为。表 3 にグロービッシュの基本ルールを示す。

(3) 学習指導要領における「即興で話す（やり取り）」について

学習指導要領では、「話すこと（やり取り）」が新たな領域として設定され、その目標の中に、「即興」という言葉が初めて使われている。加えて、「即興で伝えあう」ことについては、「話すための原稿を事前に用意してその内容を覚えたり、話せるように練習したりするなどの準備時間を取ることなく、不適切な間を置かずに相手と事実や意見、気持ちなどを伝えあうこと」と解説されている。また、話すこと（やり取り）に関連した言語活動として、「ア 関心のある事柄について、相手からの質問に対し、その場で適切に応答したり、関連する質問をしたりして、互いに会話を継続する活動。」とあり、互いに協力して対話を継続・発展させなければならないとされている。

以上のことを踏まえて、本研究では即興性を「不適切な間を置かずに相手と事実や意見、気持ちなどを伝えあうこと」、「不適切な間」を「対話が継続・発展できないこと」と定義する。

(4) 「即興性」の育成について

学習指導要領解説の外国語編では、指導上の配慮事項として、「やり取りの際には、最初から流暢かつ正確な言葉遣いで応答ができることを求めるべきではない。実際の指導の際には、いつも十分な準備をしてから発表するといった一定の型にこだわり過ぎずに、即興的なやり取りの機会を十分に確保していくことが望まれる。」とある。本研究における授業実践においても、ICT を効果的に活用し、学習アプリを用いたインプット活動とアウトプット活動を、日常の帯活動として取り組むことで、即興的なやり取りの機会を十分確保することに留意する。

(5) コミュニケーションストラテジーについて

外国語を学ぶ目的の一つは、それを用いてコミュニケーションをすることである。Stern (1983) は、十分に習得していない外国語でコミュニケーションを図ろうとする時に起こる課題に対応する方略を、コミュニケーションストラテジー（表 4）と定義しており学習指導要領解説では、「会話を継続・発展させるために必要なこととして、①相手に聞き返したり確かめたりする（中略）、②相づちを打ったり、つなぎ言葉を用いたりする（中略）、③相手の答えを受けて、自分のことを伝える（中略）、④相手の答えや自分のことについて伝えたことに『関連する質問』を付け加える（中略）、などが考えられる。」と述べられている。

以上を踏まえ、この 4 つをコミュニケーションストラテジーと定義し、対話を継続、発展させる力の育成を目指した授業の設計を行う。

(6) コミュニケーションストラテジーの育成について

コミュニケーションストラテジーの育成を目指す上で、以下の 4 つが主要と考える。

① 8 割捨てる

言語学者の George Kingsley Zipf (1949) は、言語を構成する無数の単語の使用頻度には偏りがあることを発見し、2 割程度の頻出単語が割合の大部分を占めるという、ジップの法則を提唱した。この理論を英語によるやり取りの場面にあてはめると、最低限伝えるべき本質の部分は、伝えたいことの 2 割くらいであり、残りの 8 割は捨てたとしても、十分に伝わると考える。その 2 割の本質がどこにあるのかを念頭に置いて英語を考えさせると、生徒の

表 4 コミュニケーションストラテジーの種類

聞き返し	反復要求	発話の繰り返しを要求
	説明要求	言葉の意味の説明を要求
	聞き取り確認	聞き取った内容が正しいか確認
	理解確認	自分の理解を確認する
発話	言い換え	別の表現で説明
	逐語訳	母語をそのまま訳する
	援助要請	分からない言葉を質問する

気持ちに余裕が生まれ、生徒自身が使う英語に独創性が生まれることが予想される。

② 大人語を捨てる

林（1951）によると、中学生が普段使用する日本語の語彙数は、約 36000 語であるとされている一方で、学習指導要領では、中学校で学習する単語数は、「1600～1800 語」程度とされ、日本語と英語では、中学生が理解できる語彙数に、大きな差があることが分かる。このような状況の中で、生徒が伝えたい内容を英語に変換しようとした時、言葉が出てこない理由の一つとして、頭の中に描いている日本語が生徒の英語語彙力で表現するには難しすぎる可能性があると考えられる。上村・大井（1992）によると、英語を母国語として話す子供の語彙数は、言葉で十分にコミュニケーションをとれる 5 歳児半で 1528 語とされており、中学校で学習する単語数とほぼ同数である。このことを踏まえ、言いたい内容を生徒がもつ英語力を用いて変換するためには、まず 5 歳児が使用するような日本語を用いてイメージしたあと、英語に変換してみるといった習慣を身に付けていく必要があると考える。

③ 直訳を捨てる

我々日本人が英語を話す際、「正しい英語が分からない」、「知っている英語が少ない」という理由から、英語を話せないと感じる人は多い。しかし、どの言語にも、その言語を使って生活している人々の生活や文化が反映されている。日本語も例外ではなく、日本語を通して日本人独特の物事の捉え方やコミュニケーションの取り方を見ることができる。故に言語的な距離が離れている日本語から英語に一語一句忠実に変換することを試みると、英語に訳せない言葉が多くあることは当たり前のことである。しかし生徒の多くは、正しい英語があるはずだと頭の中で模索する。そのため、会話をテンポよく継続することができず、「正しい英語が分からない」、「知っている英語が少ない」と感じてしまっている。このことを踏まえ、指導に当たる際には、正しい英語を使うことに固執して沈黙が続く不自然なやり取りをするのではなく、コミュニケーションを円滑にするという英語学習の本質的な目的を再確認することが重要であると考ええる。

④ 抽象語を捨てる

我々は普段、抽象的な言葉を織り交ぜながらお互いの会話を豊かにしていく。同様に、英語にもイディオムと呼ばれる抽象的な表現が多くあるが、それらをネイティブスピーカーのように使いこなすようになるには、やはり膨大な語彙力が必要となり、学び始めの生徒にとってはとても難しい。それに対して青木（2017）は、変換しようとする日本語をより具体的な表現に落としこむ手順を踏ませ、概念的なものから具体的な行動や、事実までに細分化していく方法を推奨している。例を図 1 に示す。以上のことを踏まえ、頭の中に思い浮かべる日本語自体が抽象的で曖昧な表現になっていないかも注意する必要があると考える。

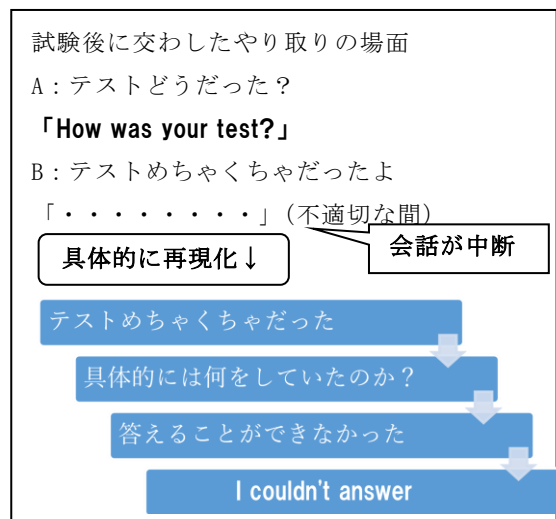


図 1 具体的な表現に再現化する例

(7) 外国語教育と ICT 活用について

文部科学省「外国語の指導における ICT の活用について」によると、外国語教育における ICT 活用の利点として、「1. 児童生徒の言語活動の更なる充実と指導・評価の効率化」、「2. 遠隔地・海外とのコミュニケーションと災害など非常時への対応」、「3. 興味・関心、学習の質を高める」と記載されている（図 2）。

1. 児童生徒の言語活動の更なる充実と指導・評価の効率化

- ・言語活動（特に「話す」、「書く」機会）の充実とパフォーマンステスト等評価への活用
- ・言語活動で活用するための、音声・文字・語彙・文構造・文法などの定着（繰り返し練習）
- ・1人1人の能力や特性に応じた学びの機会の確保

本研究の
重要項目

2. 遠隔地・海外とのコミュニケーションと災害など非常時への対応

- ・遠隔地や海外等の児童生徒、英語話者との「本物のコミュニケーション」
- ・新型コロナウイルス対応や大規模災害等に伴う休業期間における学びの保障
- ・小規模校における対話的な学びが可能

3. 興味・関心、学習の質を高める

- ・コミュニケーションのモデル提示、「聞く」「読む」ための素材の提供
- ・板書やイラスト等により、日本語を介さずに英語のまま理解することを支援

図2 外国語教育におけるICT活用の利点

2 デジタル教材の作成と活用

本研究では、コミュニケーションストラテジーを高めるために、ICT活用の利点を機能的に関連付けた教材の作成と活動を実施、検証する。

そこで、言い換え練習と実践的な対話活動を機能的に往還するICT活用場面をつくり、帯活動により継続的に取り組む。ICTの活用は本校で導入、活用されており、1つのアプリで前述した2つの活動を一元化できるロイロノートスクール（以下、ロイロノート）を使用する。ロイロノートは、文字や動画、写真等をデジタルファイルとして記録、共有、整理に優れた機能を持つ学習アプリである。

(1) 動画の記録と共有による言語活動の充実

英語によるやり取りの様子を生徒同士で撮影、共有し、客観的に振り返るという学習サイクルを、日常の帯活動として継続して行った。

- ① 教師は活動のデモンストレーション動画を事前に撮影し、モデルとして生徒に配布する。
- ② 生徒は英語による「やり取り」活動を行い、その様子を動画で記録する。
- ③ 記録した動画をループリックに基づいて生徒同士で相互評価する。



図3 生徒同士で動画を撮影

①により話す活動までの流れがスムーズとなり、「やり取り」活動の時間が確保され、充実した言語活動が予想される。③により知識及び技能を獲得することや思考力、判断力、表現力等を身に付ける過程における生徒の「主体的に学習に取り組む態度」を見取る材料を得ることができる。さらに、教師は提出された動画を、授業の後に繰り返し視聴することができるため、個別のフィードバックをすることが可能となり、評価の効率化を図ることができる（図3から図5）。



図4 ロイロノートの動画提出画面



図5 グループ内で共有する様子

(2) デジタルワークシートによる言い換え

英語によるやり取りが、途中で途切れてしまう原因に、1つの表現に固執してしまうことが挙げられる。そこで、普段から表現を4つに広げる練習をすることで、実際の場で即座に伝えられなかったときに、すぐに他の表現に切り替える習慣を養うことができる考える。使用するデジタルワークシートには、中央に「英語にしたい表現」を入れるスペースを設け、その周囲に4つのボックスを設定し、そこには、自分が言える単語を使っ

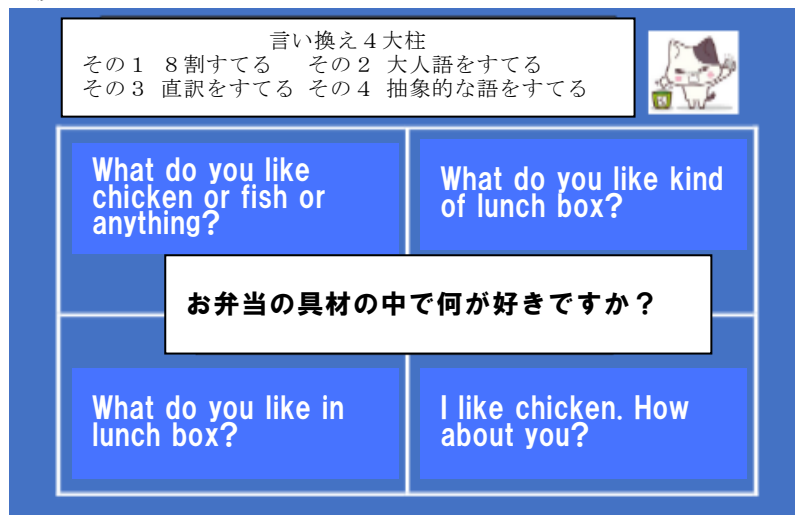


図6 言い換え練習のためのデジタルワークシート

て言い換えた文を書き込ませることにした(図6)。これまで紙媒体のワークシートは、取組後に共有し、学び合いをすることが困難であった。ワークシートをデジタル化し活用することで、生徒同士がお互いの言い換え表現を閲覧、評価を容易にできるため、様々な英語表現に触れ、自らの表現の幅を広げることが期待できると考える。

3 実態調査

沖縄県立与勝緑が丘中学校2学年(73名)の生徒を対象に意識調査を行った。

(1) 「英語ができる」ことについて

「英語ができるようになりたいか」と質問したところ、「とても思う」という回答は全体の67.1%であった(図7)。また、「どちらかというと思う」という回答は、全体の30.1%であった。このことから、97.2%の生徒が、「英語ができるようになりたい」という意識があり、英語習得に意欲的であることが分かる。また、「英語ができるとはどういうことか」という問いには、75.0%が「話せること」と回答し、15.2%が「書けること」と回答していることから、9割の生徒が英語を発信する技能を身に付けることを、英語学習の目標としていることがうかがえる(図8)。従って、本研究では英語発信力について、自分自身の学びを深め、学習指導要領で初めて示された「即興」で英語を話す力の育成に重点を置いて研究を進めていく。

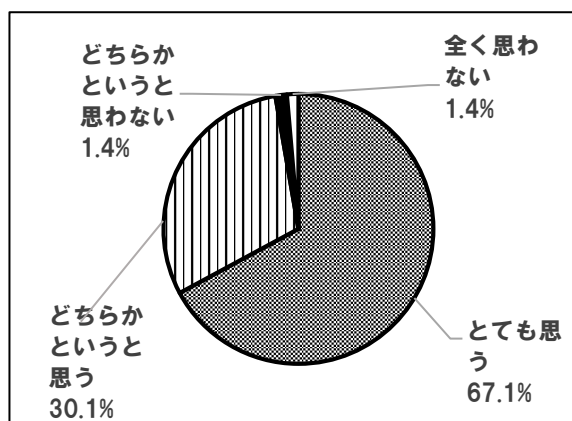


図7 英語ができるようになりたいか

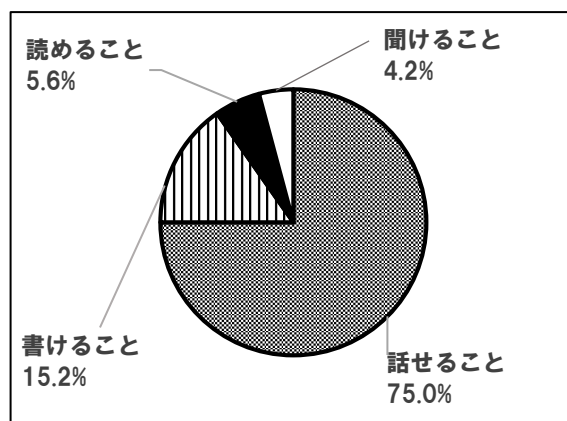


図8 英語ができるとはどういうことか

(2) 「英語で話すこと」について

「英語で話すことは得意か」という項目では、40.0%の生徒が「全く得意ではない。」と答えており、42.9%の生徒が「どちらかという」と得意ではない。」と答えている(図9)。この結果

から、即興的なやり取りにつながる実践的な活動場面の必要性が読み取れる。さらに、英語で話すことが苦手な理由を尋ねたところ、語彙力や文法力、発音に自信がないことが原因であることが分かった。学習指導要領解説では、「やり取りの際には、最初から流暢かつ正確な言葉遣いで応答ができることを求めるべきではない。」と記されていることを生徒にも周知し、「英語を話す活動」に対する心理的ハードルを下げる必要がある。また、表現力に関する理由に加えて、英語を話す活動が少ないと多くの生徒が答えていた。日常の授業における英語を話す機会を増やし、「英語を話す」ことに慣れさせていく必要があると考える。

(3) 外国人と話すときに何が重要か

外国人と話すときに何が一番重要かについても調査した（図 10）。「伝える気持ち」の回答が 55.6%と最も多く、伝え方についてもコミュニケーションストラテジーと捉えることで効果的に学習を進めていくこととした。また、残りの 44.4%は表現力について回答しており、コミュニケーション方略を学ばせながら、それを支える基礎的な英単語や文法、さらに発音等を学ばせる必要があると考える。

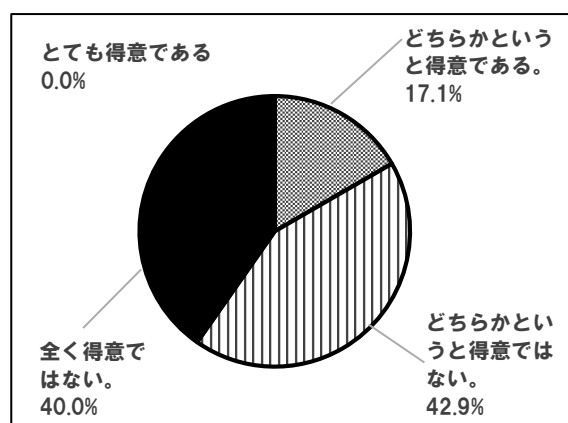


図 9 英語で話すことは得意か

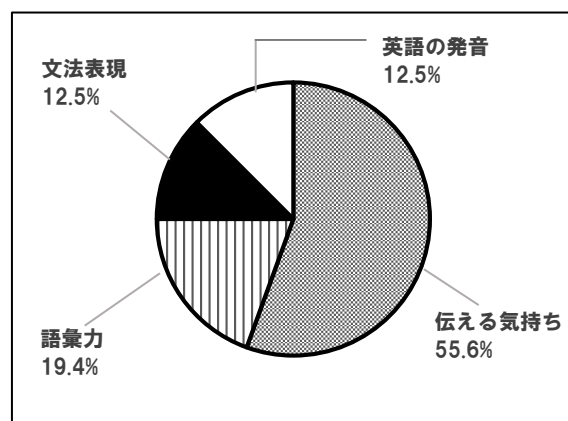


図 10 外国人と話す時に何が一番重要か

Ⅲ 指導の実際

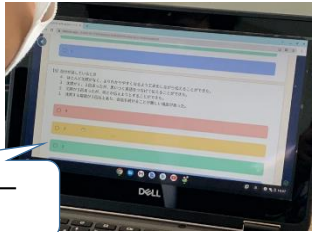
1 実践の概要

本実践では、英語で言えなかった表現を振り返るだけでなく、自分の英語力で表現を紡ぎ出す活動と組み合わせることで、即興で英語を話す力を高めていくことをねらいとし、通常の授業の冒頭に帯活動として位置付け取り組んだ。この一連の活動を、帯活動という短い時間の中で十分行うことは時間的に難しいため、活動を 2 つのパターンに分け、活動にかける時間を確保することとした。各活動は 15 分として設定した。

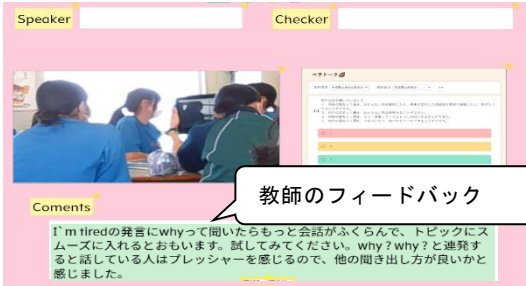
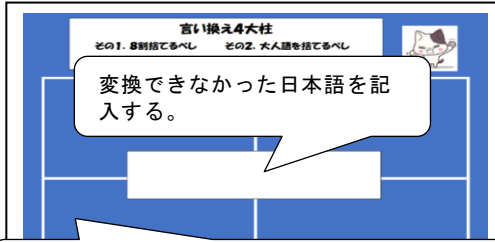
2 ロイロノートを活用した話す活動（帯活動）のパターン

(1) パターン A（動画撮影、共有とデジタルルーブリック表による相互評価）

	学習活動（□生徒 ■教師）	ロイロノートの活用
導入 2 分	1. トピックとモデル動画の視聴 ■教師によるモデル動画を添付したトピックカードを生徒に事前配信する。 □4 人グループで座り、今週のトピックと教師によるモデル動画を確認し、必要であれば繰り返し視聴する。 ■会話を継続、発展させるためのコミュニケーションストラテジーを紹介する。	モデル動画を添付したトピックカード （目的：活動に対する興味関心を高める） 

展開 10分	2. やり取り ■提出フォルダーを作成し、生徒間通信ができるように、ロックを解除しておく。 □4人グループの内、2人がやり取りを行う。(活動時間は、段階的に伸ばしていった。)やり取りを行わない生徒は、動画を撮影しながら、活動の様子を観察する。撮影終了後、グループ内で共有する。	動画撮影（活動の記録をする） 
まとめ 3分	3. 相互評価 □やり取りを観察していた生徒はループリック評価（アンケート機能を使用）を行い、動画と評価を1つのカードにまとめて提出する。 □やり取りの様子をグループ内で振り返り、良かった点や改善点などを話す。	動画提出・ループリック評価   4「実際に使用したループリック」を参照

(2) パターンB (デジタルワークシートを用いた言い換え練習、共有)

	学習活動（□生徒 ■教師）	ロイロノートの活用
導入 3分	1. 教師によるフィードバックの確認 ■前時に生徒が提出した動画にコメントし、言い換え練習シートと共に一斉送信しておく。 □コメントと共に動画を視聴し、前時に行った活動の振り返りをする。 (目的：やり取りを継続できなかった原因を把握)	教師によるフィードバック添付・返却  教師のフィードバック
展開 10分	2. デジタルワークシートを使った、言い換え練習 ■やり取りの活動で、英語に変換できなかった日本語を、デジタルワークシート中央のスペースに入力し、その英語訳を周囲のスペースに入力する。 □机間指導をし、生徒の活動を激励したり、英語に変換できず困っている生徒に、ヒントを与える。	デジタルワークシートの配布と編集  変換できなかった日本語を記入する。 周りの4つの空欄には容易な表現を用いた日本語をイメージして英語に変換、記入する。
まとめ 2分	3. デジタルワークシート共有 □書き込んだデジタルワークシートを、教師提出用ファイルと生徒共有用ファイルに送信する。 □共有されたデジタルワークシートを閲覧し、英語に変換する際のアイデアを学ぶ。 ■机間指導中に発見した、参考になるデジタルワークシートを、画面共有し、解説する。	デジタルワークシート共有画面  たまごやきが好き

3 帯活動計画（全 16 時間）

ロイロノートの機能を利用して「やり取り」活動の動画を評価する。

時	パターン	トピック	生徒の活動目標	教科書との関連
1	A	“Do you eat sushi with your hand or chopsticks?” 「あなたは寿司を手で食べますか、それともお箸を使いますか？」	○相手の発言に反応できる。 ○相手の質問に答えた後に、質問を相手に投げ返すことができる。	Here We Go! 2 (光村図書) You Can Do It! 3 日本のおもしろいものを紹介しよう P. 126～P. 127
2	B			
3	A			
4	B			
5	A			
6	B			
7	A	“Do you want to bring your lunch box or have school lunch?” 「昼食は弁当がいいですか、それとも給食がいいですか？」	○会話の入り口として、話し相手のことを褒めることができる。 ○相手から褒められたら、Thank you で終わらずに、会話を広げることができる。	Unit 7 Amazing Australia P. 95～P. 103
8	B			
9	A			
10	B			
11	A			
12	A	“Do you want to learn from AI teacher or real teachers?” 「AI と生身の先生どちらから授業を受けたいですか？」	○話題を変えることができる。 ○会話を締めくくるフレーズを使って、会話をスムーズに終了することができる。	Unit 6 Work Experience P. 75～85
13	B			
14	A			
15	B			
本時	A B			

4 実際に使用したルーブリック

評価については、動画に写っている生徒以外の同じグループの生徒も参加した。評価の内容はロイロノートの機能を使って集計し、評価基準となるルーブリックについては、下記に記述する。なお、評価基準については学期末のパフォーマンステストに使用するルーブリックと同じものを活用することで活動の一貫性を図った。

相手の話を聞いているとき（思考・判断・表現）	
4点	相手の話をよく聞き、分からない時は質問したり、相手が沈黙した時は別の言葉で質問したり、助けたりすることができた。
3点	相手の話をよく聞き、分からない時は質問することができた。
2点	相手の話をよく聞き、もう一度言ってくれるようにお願いすることができた。
1点	相手の話をよく聞き、うなづいたり、相づちを打ったりすることができた。
自分が話しているとき（思考・判断・表現）	
4点	ほとんど沈黙がなく、より分かりやすくなるよう工夫をしながら伝えることができた。
3点	途中で沈黙があったが、思いつく英語をつなげて伝えることができた。
2点	途中で沈黙があったが、相手に助けられながら伝えることができた。
1点	途中で沈黙する場面があり、会話を続けることが難しい場面があった。
途中でトピックを変えた回数（思考・判断・表現）	
4点	最後まで1つのトピックについて話すことができた。
3点	途中でトピックが1回変わった。
2点	途中でトピックが2回変わった。
1点	途中でトピックが3回以上変わった。
前回言えなかった表現が言えるようになってきているか（主体的に学習に取り組む態度）	
4点	言えるようになった。
3点	どちらかというと言えるようになった。
2点	どちらかというと言えないようになってない。
1点	全く言えるようになってない。

5 本時の学習指導（16／16）

（1）本時のねらい

トピックについて、質問に応答したり関連する質問したりして会話を継続できる。

（2）本時の評価基準（ルーブリック）

評価の観点	思考・判断・表現
評価基準	やり取り：1、2回程度沈黙があるが、分からない時は質問をしたり、もう一度言ってくれるようお願いしたりすることができる。 言い換え：変換できなかった日本語を、すでに知っている単語を使って、ワークシートに2文程度書いて表現することができる。
評価方法	授業内：行動観察（やり取り） 机間指導（言い換え） 授業後：動画視聴、振り返り（やり取り） ワークシートチェック（言い換え）

（3）「めざす子供の姿」の実現に向けた授業改善

場 面	工夫点（発問等）	子供の姿
主体的に「問い」をもち、自分なりの考えをもつ		
言い換え練習で英語に変換する場面	忠実な英語訳に固執させることなく、生の英語表現を引きだせるよう声かけをする。	自分がすでに知っている単語を使って、どのように伝えたい内容を表現できるか考えることができる。
他者との交流を通し、「問い」が生まれ自分の考えを広げ深める		
やり取りをする場面	伝えたい内容を発言させるだけでなく、会話を継続、発展できるような方略も指導する	相手の発言に反応、応対、質問したりして、お互いに会話を継続、発展させようとする可以尝试。
学びの過程を振り返り、新たな「問い」をもつ		
やり取りをする場面	動画として記録、共有する。 ルーブリックを用いて、生徒相互評価をする。	自分の活動を客観的に振り返り、活動をさらに充実させるためにはどうすればいいのか考えることができる。

（4）展開

過程	学習活動・内容・発問等	生徒の活動	指導上の留意点、評価等
導入 5 分	めあて：相手の質問に、答えたり反応したりして会話を継続することができる。		
	1. 本時の流れとねらいの説明 2. 前時の活動（やり取り）の振り返り	・授業の見通しを立てる。 ・教師によるフィードバック動画を確認し、会話を継続、発展できなかった場面を発見する。	・黒板に書き出し、提示 ・事前にロイロノートで各生徒に送信
展開 30 分	3. 言い換え練習	・デジタルワークシートを使って言い換え練習をする。	・机間指導 声かけ
	4. ワークシートの振り返り	・デジタルワークシートを、教師と、全生徒に送信する。 ・共有されたワークシートを閲覧する。	・考え方を共有するように指導
	5. やり取り トピックとモデル動画の提示 トピックについてやり取り	トピック：Do you want to learn from AI teacher or real teachers? ・トピックとモデル動画を確認する。 ・モデル動画を参考に、トピックにつ	・机間指導をし、生徒のよさを褒める。

		いて話す。 ・やり取りを観察する生徒は、ループリック表を基に、評価する。 ・動画を提出シートに貼り付けて、教師と、全生徒に送信する。	・教師は授業後動画を閲覧し、コメントをする。
まとめ 10 分	6. 活動の振り返り フィードバック 即興の言い換え	・観察していた生徒は、やり取りをした生徒に対し、良かった点と、改善した方が良い点を伝える。 ・活動のなかで、言えなかった表現を共有し、即興で言い換える	・机間指導をし、生徒同士のフィードバックの様子を観察する。 ・時間が余れば行う。

IV 仮説の検証

研究仮説に基づき、英語でやり取りする活動において、動画ファイルとデジタルワークシートを機能的かつ継続的に活用することにより、学びを客観的に捉え、コミュニケーションストラテジーを高め、即興で話す力を引きだすことができたかを検証する。検証に当たっては、パフォーマンステスト及び自己評価、相互評価、事後アンケートの結果をもとに分析及び考察を行う。

1 コミュニケーションストラテジーを高める ICT 活用

(1) 動画として記録「客観的な振り返り」

やり取りをする活動の様子を動画として記録し振り返る活動を行った。即興的なやり取りの際、生徒は意図することを伝えるために精一杯で余裕がない様子が動画で客観的にみることができた。活動後にその動画を話して・聞き手の両方で視聴することにより、相手が伝えようとしていたことや、伝えたい内容を分かりやすく伝える工夫などを思いつくきっかけとなった。また、検証授業後行ったアンケートでは、「英語を話す活動を動画で振り返ることは即興で話すことに役に立ったか」(図 11) という質問に

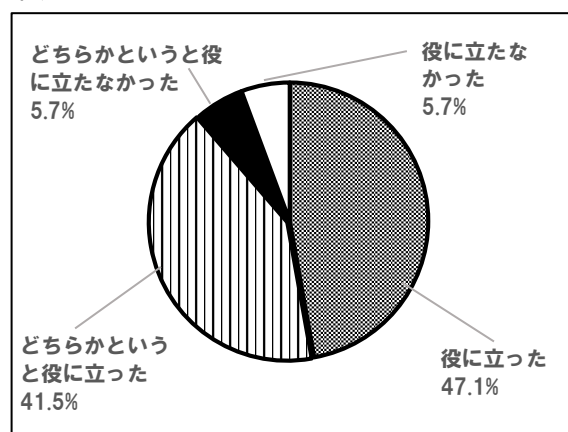


図 11 動画で振り返ることは役に立ったか

88.6%の肯定的な回答を確認することができた。さらに、「自分がどういうふうに話を進めているのかが分かる。」や「他の生徒のジェスチャーを動画で見ることで自分の発表に参考になった。」といった、言葉によらないコミュニケーションに関する意見もあったことから、学習者が会話を発展させ継続させることにも、一定の効果があったことがうかがえる。図 12 に不適切な間の改善状況を示した。

トピック：寿司を手で食べますか？ A:Hello, 実践初期 B:Hello. A:Do you like Sushi? B:Yes, I do. A:And…なんだっけ…え…もうわからない B:…Do you like Sushi? A:…なに…Yes, I do. What…kind…sushi… ネタ… B:Ah I like Tuna. A:and…一緒に行こう (45 秒)	➡	トピック：給食と弁当どっちが好き？ A:Hello, how are you? 実践後期 B:Hello. Fine, and you? (聞き返し) A:I'm hungry. B:Oh,me too me too. (反応) A:What do you eat breakfast? B:I ate rice and salad and soup, miso soup! A:Good for your body! (賛同) B:Ok. Do you want to bring your lunch box or have school lunch? A:I want to bring lunch box. B:Me too. Why? (反応)(聞き返し) A:My mother cook my favorite food. B:Yeah (1 分 30 秒)
--	---	--

図 12 同一ペアによるやり取りの変化例

(2) デジタルワークシートによる言い換え

① 自分の英語を紡ぎだす習慣の確立として

やり取りをする活動の中で、英語に変換できず言えなかった表現を振り返り、自分の知っている単語で言い換える活動を、デジタルワークシートを活用して行った。この活動を行う際、頭の中で英語に変換しようとする日本語と生徒が持つ英語の語彙力を繋げるために、語彙レベルを下げた容易な日本語に変換する手順を踏むなどといった手立てを行った。最初の内は容易な日本語に変換することにも苦戦していたが、徐々に慣れ始め、楽しみながら言い換え活動に取り組んでいた。加えて、実践後期には何通りもの表現をデジタルワークシートに書き込むことができるようになっただけでなく、伝えたい内容が否定文の内容であっても、自分が表現しやすいように肯定文に言い換えていくという独創的な表現も見られた（図13）。「以前に比べて会話を継続できるようになったか。」というアンケートの問いに対し、肯定的な意見が94.3%を占めた。その要因として、「知らない英語を無理やり言うのではなく、知っている英語でどうにかする力が身に付いた。」「簡単な英語を使って表す力が付いた。」という意見が挙げられた。このことから、生徒が持つ英語力で表現する習慣が付き、即興でやり取りをする場面においても、大いに有用であったと捉えることができる（図14）。一方で、これまでの逐語訳的な習慣が抜けず、活動に否定的な意見も確認できたが、今後継続して取り組むことで、柔軟な表現方法を習慣化させる必要がある。

英語に表現できなかった日本語	語彙レベルを下げ、容易な表現にした日本語
私は人間関係を築く必要がない	コミュニケーションをとらなくてもいい
	集団が好きじゃない
	ひとりが好き

独創的

図13 容易な表現に言い換えた例

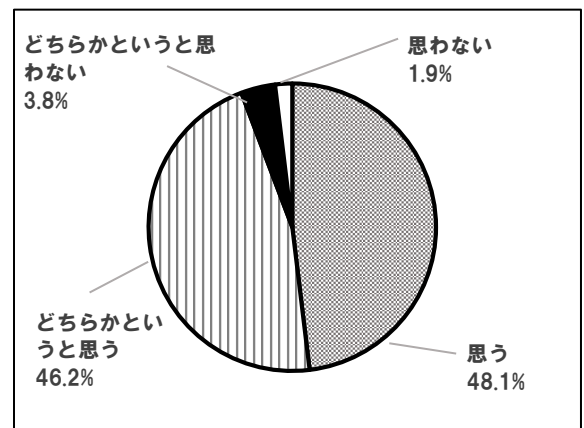


図14 会話を継続できるようになったか

② 考え方を共有する場として

デジタルワークシートを活用した言い換え活動における最大の利点は、答えは一つではないということを生徒自身が知ることにある。そこで、デジタルワークシートを生徒同士共有し、英語の様々な紡ぎだし方を他の生徒から学ぶよう工夫した。生徒の表現はシンプルなものからユニークなものまで多種多様であったが、ICTの利点が発揮され、スピーディーかつコンパクトに全生徒のデジタルワークシートを共有し、新たな表現のひき出し方を発見する機会を多く作ることができた。図15に示したワークシートからも分かるように、一つの変換したい日本語に対して複数の英語表現を出せるようになっており、言葉が見つからず会話が継続できないという課題の解決に向けた大きな役割を果たしたと考察する。

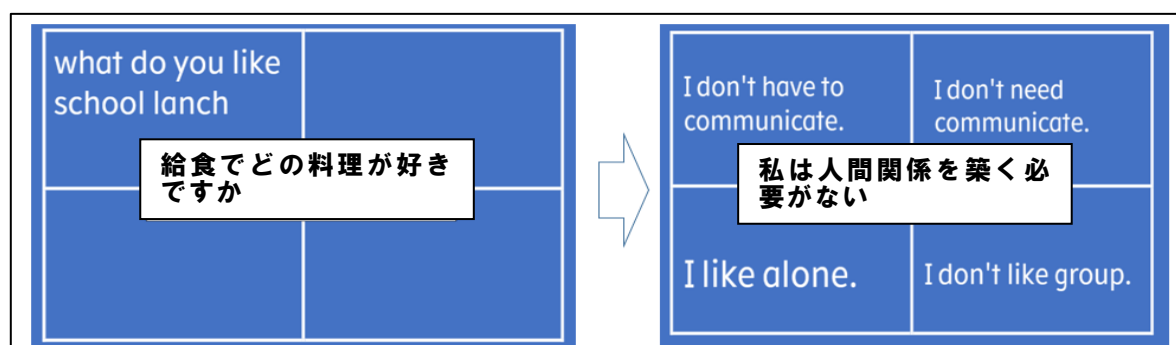


図15 同一生徒によるデジタルワークシートの変化例（生徒の表現を忠実に掲載）

2 学習の達成状況の把握と学習調整

本実践で行われている活動と同様な、与えられたトピックに関して即興でやり取りをするパフォーマンステストを学期末に実施した。その際に使用するルーブリックを生徒と共有し、日常の活動に取り組む際に生徒による相互評価を行った（図 16）。生徒が評価基準を把握することが可能となった結果、見通しを持って日々の活動に取り組むことができた。また、他の生徒の活動の様子を評価することで、生徒同士で助言しあったり、他の生徒の良さを自分の活動に生かしているようにしたりする姿が見られた。加えて、このルーブリックによる評価を、ロイロノートアンケート機能を使って行うことで、即座に集計された結果を、生徒自身が学習の達成状況を素早く確認し、コミュニケーションストラテジーを獲得する段階的な過程を自ら調整していくことにも、大きな役割を果たした（図 17）。



図 16 活動中におけるルーブリック評価の様子

【4】相手の話をきいているとき

- 4 相手の話をよく聞き、わからない時は質問したり、相手が沈黙した時は別の言葉で質問したり、助けたりすることができた。
- 3 相手の話をよく聞き、わからない時は質問することができた。
- 2 相手の話をよく聞き、もう一度言ってくれるようお願いすることができた。
- 1 相手の話をよく聞き、うなづいたり、相づちをうったりすることができた。

☐ 4

☐ 3

☐ 2

☐ 1

図 17 ロイロノートアンケート機能の画面

3 まとめ

帯活動として、即興でやり取りをする活動を継続的に行ったことで、生徒一人一人が英語を実際に話す機会が増え、力を確実に高めていく様子が、活動を記録した動画の内容から感じとることができた。さらに、4つの柱、①「8割捨てる」、②「大人語を捨てる」、③「抽象語を捨てる」、④「直訳を捨てる」を意識して言い換え活動の指導にあたった。そのことが、即興で英語を話すことへの心理的ハードルを下げ、生徒が安心して取り組めた大きな要因となったとも考える。この取組の有用性を検証するために、取組前後のやり取りの動画を比較した。取組初期はやり取りの回数が平均2回に留まり、相手に聞き返したり相手の答えに関連する質問を付け加えられず、対話が途切れる様子がうかがえた。しかし、取組後には相手の意見に共感を示したり、相手への答えに関連する質問を加えるなど、対話を発展させる工夫がみられ、やり取りの回数も平均8回に増加したことを確認できた。

以上のことから、コミュニケーションストラテジーを高め、即興的なやり取りの力が育成されたと考える。

VI 成果と課題

1 成果

- (1) 直訳にこだわらず、自分なりの英語に言い換えて話す習慣を確立することで、コミュニケーションストラテジーを高め、対話を継続発展する力を養うことができた。
- (2) やり取りと言い換え練習の中にICTを組み込み、効率的に学習を進めることが可能となったことで、充実したコミュニケーション活動に取り組むことができた。

2 課題

- (1) 本実践を継続して行けるよう、教科担当者での連携やカリキュラムの検討が必要である。
- (2) 今後は海外の生徒との交流活動と本実践を組み合わせることで、学習の成果をより生徒が味わうことができるよう充実した活動となる工夫が必要である。

〈参考文献〉

- 国立教育政策研究所 2020 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校英語
- 小池直己 2019 3語で伝わる！英会話 宝島社
- 青木ゆか 2018 なんでも英語で言えちゃう本 日本経済新聞出版社
- 鳥飼玖美子 2018 英語教育の危機 講談社
- 文部科学省 2017 『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語編』
- 文部科学省 2017 英語力調査結果（高校 3 年生）の概要
- 鳥飼玖美子 2017 話すための英語力 講談社
- 青木ゆか 2017 ずるい英語 日本経済新聞出版社
- 鳥飼玖美子 2016 本物の英語力 講談社
- 鳥飼玖美子 2011 国際共通語としての英語 講談社
- デイビットセイン・小池信孝 2006 あいづち英会話 ジャパンブック

〈参考WEBサイト〉

- 文部科学省 2019 中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語編
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_010.pdf（最終閲覧 2021 年 12 月）
- 文部科学省 2020 外国語の指導における I C T の活用について
https://www.mext.go.jp/content/20200911-mxt_jogai01-000009772_13.pdf（最終閲覧 2021 年 11 月）
- 帯活動その正体と魅力
https://tb.sanseido-publ.co.jp/english/newcrown/pdf/ten027/TEN27_02.pdf（最終閲覧 2021 年 9 月）
- 外国語教育はこう変わる
<https://www.youtube.com/playlist?list=PLGpGsGZ3lmbCsze5PvMhQ1TS-jXEZKA4f>（最終閲覧 2021 年 9 月）
- 苦手な人ほどうまくなる英語 グロービッシュ入門
https://www.sunmark.co.jp/book_files/pdf/978-4-7631-3175-1.pdf（最終閲覧 2021 年 9 月）